【第三種郵便物認可】 日本経済新聞 2023年（令和5年）12月13日（水曜日）

北陸

清川メッキ工業

技術特化で提案呼び込む

小型の電子部品や半導体のメッキ加工で注目される清川メッキ工業（福井市）は2023年に創業60周年を迎えた。後発だったが、技術開発に注力し、現在に至るまで成長を続ける小型機器向けの事業を確立した。創業者の信念が技術の進歩に後れを取らない原動力となっている。

清川メッキは1963年、清川メッキ工業所として福井市で創業した。創業者である清川忠会長はもともと繊維会社に勤めていたが、独立の道を模索する中で当時事業者が少なかったメッキ加工に挑戦しようと決意した。子どものころにメッキに触れた経験も後押し、福井県や大阪府のメッキ会社で修業し、地元福井での独立を果たした。

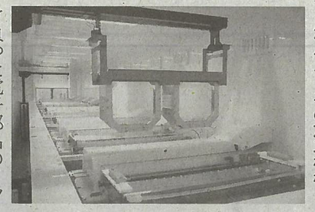
メッキ加工事業者としては後発だったので、仕事をとるのも容易ではなかった。そこで会長が行き着いたのは「できないと言わない」「他社がやらないところで仕事をする」という信念だ。当時地元でやる事業者が少なかったアルマイト処理をきっかけに、一時期はオートバイのアルミ合金のメッキ加工事業にも取り組んだ。

清川社長は「顧客が望む『新しいもの』の開発に注力して成長してきた」と語る

現在の成長につながる転機となったのが電子部品のチップが登場し始めた70年代半ばだ。導線でつなぐリード付き部品からチップ型部品に変わりつつあり、チップの両端にメッキ加工ができないかとの相談が舞い込んだ。おりしも当時主力事業だったオートバイ向け製化で案件が減っており、会長も「電子部品はこれから伸びる」と二つ返事で請け負った。

ただ、製品も見ずに請け負った電子部品のメッキ加工は容易ではなかった。当時から小型化が進んでおり、今まで通りの加工方法では歩留まりが悪い。そこで同社は試行錯誤の末、溶液を入れたバレル（たる）にチップを入れてまとめてメッキ加工する方法を編み出し、大量生産による供給力確保とコスト削減を実現した。

営業人材、あえて持たず


清川メッキの加工機械

2代目となる清川肇社長は「小さいものに絡むのはいいこと」と語る。環境問題への対応から省エネへの需要が高まるなか、小型化による必要エネルギーの削減は今後も底堅い市場があると見込む。肇社長が進めた半導体のメッキ加工と電子部品の両軸で、医療や電気自動車（EV）などの基盤を支える加工技術で勝ち残りを目指す。

同社のもう一つの特徴は「営業をしない」戦略だ。肇社長は「30年ほど前から営業の人材はいない」と話す。展示会で自社の新技術などをアピールし、外部から技術の活用方法を提案してもらうことで案件につなげるという。この方法には、顧客からの提案に「できないことはない」と新規事業へ積極参入した忠会長のスタンスが根底にある。

清川メッキは加工を受託するビジネスモデルであるため、最終製品で顧客に訴求はできない。60年培ってきた技術を今後も進歩させ、顧客の様々な要望を受け入れることで事業基盤をさらに拡大する考えだ。

（津兼大輝）

＝11月21日付日経産業新聞に掲載

NIKKEI BUSINESS DAILY 日経産業新聞

加賀友禅、布だけじゃない

奥田染色

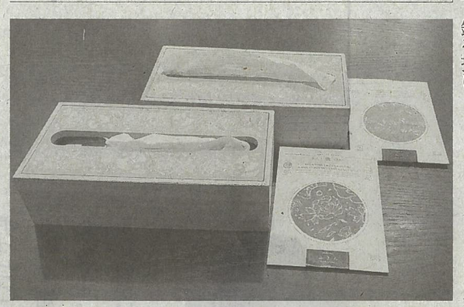
日常雑貨でブランド強化

珪藻土に模様やぼかし

加賀友禅の着物などの染色を手がける奥田染色（金沢市）が、インテリア雑貨に製作を広げている。伝統の染め技法を布以外に応用し、華やかな絵柄のペーパータオルボックスなどを商品化した。加賀友禅の着物や帯などの生産額はピーク時の1割以下に減っている。生活に身近な日常雑貨を作って新たな顧客を開拓するほか、友禅の魅力に触れてもらう機会を増やす。

このほど、珪藻（けいそう）土を蓋の部分に使ったペーパータオルボックスを商品化した。加賀友禅の技法を使い、蓋に細かい模様やぼかしといった絵柄を施した。型紙を置いて、にじまないように「防波堤」の役割を果たすのりを置いてから染める。絵は2種類で、美しく豊かな暮らしが続くことを願って牡丹（ぼたん）、分銅、鍵を描いたものと、開運などをモチーフに藤、菖蒲（しょうぶ）、七宝、小づちで彩ったものにした。

華やかに染めたバスマット


蓋の部分に染色を施したペーパータオルボックス

珪藻土は水分の吸収性が高く、ぬれた手で蓋を触ってもすぐに乾くため使い勝手がよい。側面などには、着物を保管するタンスでよく用いる桐（きり）を使った。重さはいずれも305グラム。価格は8800円で、オンラインショップなどで扱う。

奥田染色は加賀友禅の可能性を着物以外にも広げようと、自社ブランド「茜（あかね）や」を立ち上げている。台所や洗面所の水回りで使いやすいシリーズとして「吸―SUI―」を展開し、ペーパータオルボックスはブランド強化の一環で商品化した。同シリーズでは食器をふくふきんなどもそろえている。

奥田染色はUBE三菱セメントの子会社、MUマテックス（旧宇部興産建材）の珪藻土バスマットの商品にも協力した。4年ほど前に、同社から製作協力の依頼があり、のりの成分などを工夫し、珪藻土に色や柄を付けることに成功した。ハナミズキなど様々な絵柄の商品があり、MUマテックスは「いろいろな色や柄ができたのは、高い染色技術のおかげ」としている。

ブランド「茜や」では、今後もインテリア雑貨を含め品ぞろえを増やしていく。奥田染色は「少しでも友禅を生活空間に使ってほしい」とする。

協同組合加賀染振興協会（金沢市）によると、加賀友禅の着物や帯などの生産額は1991年度の約200億円をピークに減少傾向にある。2018年度は25億円となり、新型コロナウイルス禍の20年度以降は7億円を割り込んだ。着物などの受注環境は厳しく、関連事業者のなかには、網戸やガラスパネルに絵柄を付けるなど新たな用途を模索する動きが広がっている。

（石黒和宏）

プレス機管理「見える化」

インテックがシステム開発

情報システムのインテック（富山市）は、日立造船の子会社でプレス機の製造や保守を手掛けるエイチアンドエフ（福井県あわら市）と共同で、自動車用の大型プレス機を効率よく管理できるシステムを開発した。稼働状況をデータでわかりやすく見られるようにした。プレス機の故障を未然に防ぎ、納入先の事業者の生産ロスを減らす。

プレス機に「IoT―Box」とよばれる装置を設置し、プレスの回数や圧力などを記録する。稼働データは装置からアマゾン・ウェブ・サービス（AWS）のクラウド上に送られ、クラウド内に設けたシステムでグラフや表にする。可視化することで、異常な動作などが把握しやすくなる。

機器の保守に必要なパーツを事前購入する際などに、判断材料にしてもらう。稼働状況をデータ化し見やすくすることで、工場内での効率的な人員配置などにも役立てられるという。

IoT―Boxを通して遠隔操作も可能で、災害時など現場に行けない際にも活用してもらう。

大阪・京都と加賀直通

日本海観光バス 新幹線延伸で 23日から

貸し切りバスや高速バスを手がける日本海観光バス（石川県加賀市）は大阪・京都と加賀温泉駅（加賀市）間の高速バスを23日から運行する。昼間に1往復し、福井駅（福井市）、芦原温泉（福井県あわら市）などを経由する。2024年3月の北陸新幹線敦賀延伸で大阪・京都と福井駅などへは敦賀での乗り換えが必要になるため、直通バスの需要が見込めると判断した。

大阪駅近くを午前9時40分に出発、京都駅を経由して福井駅に午後2時、加賀温泉駅前に午後3時30分にそれぞれ到着する。石川県側からは加賀温泉駅に近い日本海観光バス前を午後1時15分に出発、大阪駅近くに午後7時に着く。大人片道の運賃は大阪・京都から福井が3500円。大阪・京都からあわら・加賀が4000円。

同社は金沢市と大阪市を結ぶ夜行バスを運行している。石川県加賀地方と大阪市を結ぶ昼行便を運行したこともあったが、新型コロナウイルス禍などで休止に。福井駅のほか、芦原温泉に近いえちぜん鉄道のあわら湯のまち駅などを経由地に追加する形にして運行を再開する。

島村楽器

「能登ヒバ」楽器を展示

金沢の店舗で、ギターなど

総合楽器店大手の島村楽器（東京・江戸川）は金沢市内の金沢フォーラス店で、石川県の「能登ヒバ」など国産材を使った楽器を展示するブースを設けた。木材を活用した展示台や椅子があり、能登ヒバの香りがする空間で、楽器選びや試奏ができる。国産材を使った楽器の魅力を発信する。

能登ヒバの楽器制作プロジェクトを進める木材卸のフルタニランバー（金沢市）と連携した。島村楽器が企画したアコースティックギターやエレキギター、ウクレレなどを並べた。能登ヒバなど国産材を使った楽器には、しっかりとした共振性があるなどの利点があるという。販売員は能登の木材について学ぶ研修や伐採現場の見学などを受講済みで、来店客の求めに応じて魅力を伝える。

ギターなどの木製の楽器は海外文化とともに日本に持ち込まれた歴史から海外産材を使うケースが目立つ。ただ、伐採規制などで輸入材のコストが上昇傾向にあり、国産材にも目が向けられるようになってきた。島村楽器は「能登ヒバをはじめ国産材でも、使いたいと思っていただける楽器ができることが分かってきた」としている。

おかげさまで 130周年
At Your Side ISHI-GROW THE 1496 CORPORATION SINCE 1893
北陸・関東 石黒建設株式会社 中京・関西

配達・購読のお問い合わせ 0120-21-4946 7時～21時
金沢076-232-3311 富山076-432-4463 福井0776-22-3490

各地のニュースは日経電子版で